講　演

楽しい聖書

阿刀田　　高

小説家の阿刀田高と申します。

まず始めに，この北海道というところは，来ただけで何か心が洗われるような，空気の綺麗な，自然の美しさというものをとても感ずるところで，東京の方は梅雨が明けたと言いながらまだ何となくじめっとしているんですが，なぜか海峡をひとつ越えただけで急に空気が乾いてくるような感じで，この素晴らしい季節にこの藤女子大学にお招きいただいたことを，感謝申し上げたいと思います。

聖書の話ということで，ここで聖書の話をするのはすこしつらいのかなあ，という気持もございました。何といっても，キリスト教の大学でいらっしゃるわけですからね。そういう思いはあったんですが，でも一方で，日本人は，聖書の知識，キリスト教の知識というのは非常に乏しいとも思います。信仰をお持ちの方は，当然のことながら，たいへんお詳しくていらっしゃるのですが，そうでない方にとっては，何だかトンチンカンなもんだなあ，というふうに考えておられる方も結構多い，と思っております。

信仰の有無ということは私は全く語る立場ではないのですが，ヨーロッパ文化というものが世界を席巻していることは，これは間違いがないわけで，悔しいです。日本の文化も素晴らしいもので，私は日本の文化というのは世界に冠たるものだというふうに，本当に思っております。これを話すと，それだけで今日は話がそっちの方へ行くくらいかなあ，と思うんですけれども。

この日本の文化の独自性，素晴らしさはもちろんあるのですが，しかし，現実に目を向けてみると，世界の文化的なもののなかにはヨーロッパ文化がことごとく浸透して，それが相当，品質のよさも含めて，支配

していることは間違いない。非常に簡単に申し上げますけれども，この壇上から見渡して，日本のお着物を着てみえるかたは多分一人もいらっしゃらないと思います。ほとんどが洋服である。洋服というのは，間違いなくその名の通り欧米の衣服である。

食べ物はね，これは日本人はまた，いやしいのか好奇心が旺盛なのか，世界のありとあらゆる食べ物を食べておりまして，東京なんていうところは，全部あるんですよね。ギリシア料理だとか，ガーナ料理だとか，チベット料理だとか，料理店はいくらでも全部あって，ないのはアメリカ料理だけだ，と。でも，あのマクドナルドというのが，あれがアメリカ料理なんだという話を聞いて，ああそうなのか，と思いましたけれども。そのように，料理の方は相当いろんなものが入ってきています。

これまたいろんなところに話が飛んでいくんですが，日本でも，宮中の晩餐会っていうのは，なぜかフランス料理を出すんですね。あれはわからないですね。吉兆かどこかの，日本料理を食べさせればいいと思うんですけれどね。自分の国の皇室というか，王家が，他の国のお客さんを招いて，よその国の料理を食べさせるってね，世界でもあんまりないですよ。宮中晩餐会っていうと，必ずフランス料理を食べさせるっていう，あれはどうか。天皇家からぜひやめてもらったほうがいいんじゃないかな，と内心思っておりますけれども。まあ料理は相当いろんなものが多岐にわたってある。

そんなことをいちいち申し上げなくても，ヨーロッパ文明が私たちの生活に非常に強く影響を与えているということは間違いないですね。そのヨーロッパ文明の根源にあるのが，一つはギリシアの文明で，もう一つはキリスト教の文明である，ということも，これまた間違いないわけです。こんなにヨーロッパの文明が私たちの中に浸透しているし，そしてそのヨーロッパ人，アメリカも入りますから欧米人といったほうがいいのかと思いますが，その欧米人の心の中に，ギリシアと，そしてキリスト教といったものが浸透していることは間違いない。

グローバリズムということは，むしろある意味では，東南アジアとかアフリカとか，南アメリカとか，ああいったところに対して目を向けていくことも非常に重要なんですけれども，根底にはやっぱり，欧米人のものの考えとか，その文化というものをわきまえていないと，なかなか

深いところは理解できない。それを理解するためには，一通りくらいは，信仰があるとかないとかに関係なく，キリスト教の知識，ギリシア文化の知識くらいは持っておいた方がいいんじゃないかなと思います。

簡単なことを申し上げれば，ヨーロッパの旅なんかにみなさんよくいらっしゃると思います。そして，ショッピングばっかり夢中になっているのは，あれはまあ，ひたすらそれが楽しみで海外に行かれる方もおられるようですが，あんなものは別に，ヨーロッパに行って買わなくたって，三越に行けばだいたい買えるんですよね。特に非常に安いというわけでもないような気がするんですけれどもね，現地で買ったからといって。

でもそれは別として，海外で美術館なんかにいらっしゃる方は非常に多いと思いますが，欧米の美術館に行ったら，ギリシア神話，それから聖書関係の知識を抜きにして，絵ばっかり見てたってだめですよね。なんでこの人裸になってこんなとこに立ってんだろうとか，なんで血だらけになってここで死んでるんだろう，なんて。やっぱり理屈がわからないと，絵ばっかり見てたって仕方ないと思うんですけれど，そういうときにも，ギリシア神話や聖書の知識というのは絶対，必要不可欠なものだと思います。そういうことを，自分でも痛切に感じたものですから，聖書やギリシア神話のことを自分なりに勉強して，いろいろ著述にあらわしたりしているわけです。

始めに申し上げておきますけれども，私は信仰を持たないんですね。なかなか神様にめぐりあわないんですよ。会ってるんだろうと言われるんですけどね，聖職の方には。会ってるのにあなたが気がつかないだけですよ，と言われます。きっとそうなんでしょう。神様ってのはいろんなところにいるらしいですからね。でもなかなかめぐりあえずにいるんですけれども。ただ私は，信仰を持つということは素晴らしいことだな，とは思っております。

その信仰を持たない立場から，聖書というのはどういうものなのかなあと思って，覗き見をしたようなこと，そんなことを今日は少しずつお話してみようかと考えております。

今ご紹介いただいた，『旧約聖書を知っていますか』，『新約聖書を知っ

ていますか』という新潮文庫の本二冊，あ，『ギリシア神話を知っていますか』というのも出しているんですけれど，その中の『旧約聖書を知っていますか』という本の冒頭１ページ目に，たまたま思いついて書いたことがありましてね。これが良かったためにこの本は売れたんじゃないか，っていうところがありまして。

一番最初に，「アイヤー，ヨッ」っていう掛け声を出してくれ，というのを書いておいたんですね。「アイヤー，ヨッ」っていうのは，青森県に，秋田かな，「あいや節」なんていう民謡もありますし，日本の民謡の中に「アイヤー」という掛け声はよくあるんですね。それにまたひとつ「ヨッ」ていう掛け声をたしまして，「アイヤー，ヨッ」ていうのを最初に書きました。

これは何かと言いますと，外国のものを読むとね，日本のものでもそうなんですけれど，名前っていうのが出てくるわけですよね。人の名前がなかなか覚えられない。ドストエフスキーだとかああいうのを読むとね，名前だけでもう嫌になってくるわけですよね。名前そのものが難しいうえに，略称なんていうのがあって，長い名前もあるし，短い名前があったりする。それを両方使うもんだから，だんだんだんだんこの人は同じ人なのか，別の人なのかわからなくなってきたりしてね。外国文学を読むときに，名前っていうのは非常にやっかいなものです。

私は今申し上げたように，ギリシア神話とか聖書のことだとか，いろいろそういうものを書きまして，ダンテの『神曲』のことも書きましたけれども，こういう，皆さんにやさしく読んでもらうものを書くときに，一番心がけていることの一つに，名前は極力出さない，ということがあります。名前を次から次へと並べると，読者はもうどんどんどんどん嫌になっていく。極力，いらない人物の名前は ── 本当はいらない人物なんていないんだけれども ── 少なくする。どうやったら名前は少なくすることができるか，ということは常に考えて書いておりました。それは，こういうものを書いたりお話したりするときに，非常に大事なことです。

けれども，名前なしでは何も進まないので，名前はやっかいだけれどもある程度は覚えてください，ということが必要で，そこで考え出したのがこの「アイヤー，ヨッ」ていうのです。これは旧約聖書ですが，アブラハム，イサク，ヤコブ，ヨセフ，この四人を理解すると，旧約聖書

のある部分が非常に明快に分かる。この頭文字をつなげると「アイヤー，ヨッ」と，こうなるもんですから，とにかく「アイヤー，ヨッ」と叫んでください，と。そうすると，「アイヤー，ヨッ」ていうのは，日本人は非常に覚えやすい合言葉で，掛け声ですからね。これさえ覚えておきますと……，まず，「ア」というのはアブラハム。アブラハムというのはリンカーンという人がいますから，わりと覚えやすいんですよ。「イ」といわれるとね —— これはアイザックと英語では読むことが多いんでしょうけれど，アイザック・ニュートンという人もいますからね —— イサクということです。ヤコブ，これはジェイコブスですね。それからヨセフと，こうずっと出てくるんですね。これを覚えると，何がうまくいくか。

だいたい紀元前 2000 年くらいですから，今からいうと四千年前になるわけですが，その頃に，ユーフラテス川の上流のほうに，アブラハムという人がいたんですね。その周辺では，原始的な多神教をみんなが信じていたわけですが，なぜかこのアブラハムという人だけは，唯一神，たった一人の神を信じていたわけです。そうすると，ある日突然神のことばがアブラハムの上にくだってまいりまして，とにかく西の方へ向かって行け，と。一族郎党を連れて西へ行って，自分の指し示す土地に住まいを持て，と。神はあんたたちの子孫の繁栄を約束しよう，と。こういうことを言われまして，それでアブラハムは奥さんと甥っ子と，それからまあそれなりの立場の人でしたから，使用人や家畜などを引き連れて，西へ西へと行って，今のイスラエル，エルサレムに近い辺りまでたどりついて，ここで繁栄しようということで，そこを拠点にして国を造った。国を造ったというとちょっと大げさだと思いますが，国とはなんぞやと言いますとそれぞれ規定がありますけれども，まあ現代でいう国とは違うひとつの集落をつくって，繁栄に向かったわけです。

ここでアブラハムがまず出てまいりまして，その子供にイサクが生まれるわけですね。ここのときに，ちょっとしたトラブルがありました。旧約聖書を読んでいると，みんな年齢が高いんですよ。確かアブラハムだって，七十とか八十，ずいぶんな歳だったと思うし，奥さんも相当の年なんですよね。子孫の繁栄を約束すると言われたって，子供がないんですよね，この二人には。それで困ってしまいましてね，じゃあもうしょ

うがないというんで，アブラハムは召使の女を娶って，そこで男の子が生まれます。

けれどもそのあとで，神様がやってきて，お前たちに子供を授けてやろう，と。そんなこと言われたって，私たち年ですから無理ですって言ったら，神様は，神に出来ないことはないって言って，本当に生まれてきたわけですよね。

これで，前の召使の女，これはアラブ系の人だったと思いますが，その女との子供，それから本妻の子供，というのが二人誕生してしまいましてね。こういうのが成長すると，跡目の争いが起きて困る。それで，この召使の子のほうは砂漠へ追っ払っちゃえと言って，水と食べ物だけをあげて追いやってしまう。旧約聖書を読むと，そんなに心配するな，この親子にも神は恵みを垂れるから，ということが書いてありますけれども，それにしても，砂漠へ追いやられてしまうんですから大変です。そこで「アイヤー，ヨッ」のイサクの方が，アブラハムの跡目をついでいく，ということになっていくわけです。

この砂漠に追いやられた，ここのところを少し詳しくお話しいたしましたのは，旧約聖書をご存知の方はもうみんなご存知のことなんですが，追いやられた人は綿々と子孫をつないでいって，やがてここから，この子孫からマホメットが生まれるんですね。生まれるったってざっと考えて二千六百年くらいは経った後のことですから，ずいぶん長い話だなあと思いますけれど，一応そういうことになっております。そしてご承知のように，ここにイスラム教が誕生して，ずっと今日まで続いているわけです。

今日あたりだってきっと，新聞を見ると，イスラエルあたりでユダヤとパレスチナの方々が争ったりして，壮絶な，悲惨な事件が起きたりしていますけれど，あれはずうっとこのときまでたどってみると，非常に言葉が悪い，品の悪いことを申し上げますけれど，本妻の子と妾腹の子の争いがここまで続いている。まず最初に，妾腹といいますか，お妾さんといいますか，正規の妻じゃないほうの子供さんが生まれて，そしてそのあと本妻の方にも子供が生まれて，二人が争うといろいろ問題があると思って片方を追いやった。それが砂漠の方へ行って，一つの勢力になった。こっちはこっちで続いていて，それがずっと，四千年間くらい

ずっと争って，いまだにあそこのところで，ユダヤ系の方々とパレスチナ系の方々とが争いあっている。これは実に四千年前にそのもとがあったと言っても，そんなに間違いじゃないとも言えるわけで，これもあとで少しお話しできると思いますが，イスラム教とユダヤ教，そしてユダヤ教の流れであるキリスト教，これはみんな同じもとから発している宗教なんですね。

そのことはあとにおくとして，そうしてアブラハムの子供のイサクが生まれます。その次にヤコブが生まれ，そしてヨセフが生まれ，その集落はそれなりに発達し，安定もしたんですけれど，やはりいろいろ問題があって，特に飢饉にあってしまい，ここではどうにもやっていけないということになって，このヨセフのときにエジプトへ逃れた。神がアブラハムに告げた土地を離れたわけです。

だが，エジプトに逃れてはみたものの，やはり異国の民ですから，そんなところでそうそういい思いができるわけがない。で，だんだんだんだん奴隷に等しいような扱われ方をしまして，苦しい生活になってみると，よくよく考えてみたら，自分たちの先祖のアブラハムが神から受けたお告げは，あのヨルダン川の流域といいますか，地中海のどん詰まりといいますか，「カナンの土地」という言葉を使っていたと思いますが，あの辺りに拠点をもって繁栄をしろよ，ということではないか。こんなエジプトくんだりまで来てこんなひどい目にあっているのはおかしいじゃないか。やっぱりあのふるさとに帰っていこう，という気運が高まってきて，そこでこのときのリーダーをいたしましたのがモーセであったわけですね。

そしてモーセが一族郎党を集めまして，あのカナンの地，地中海のどん詰まりのあそこの土地にまた帰っていこう，あれが神様が自分たちに約束をしてくれた土地ではないか，ということで帰って行く。一族郎党を連れて行くわけです。そうするとエジプトの王様は，労働力は失われるし，あいつらは逃がしておくと今にグループを作ってここを攻めてきたりするかもしれない，いったんは国外に行っていいよと許可はだしたけれども，あいつらを逃がすとろくなことがない，と思うんですね。最初はダメだダメだと言ってたんですけれどね，モーセっていうのがいろ

んな奇蹟を起こすもんだから，エジプトの王様もこれだけの奴らをここに置いておくとろくなことがないからもう出てけって，一旦は出したんだけれども，ちょっと待てよってことで，また追いかけるわけですね。

モーセの方は，こちらはもうただただ羊や山羊なんか背負った，養老院出てきたみたいなのばっかりで，若い人も当然いたとは思いますけれど，あまりたいしたことはない。向こうは軍隊ですから。断然強い。エジプトの王はファラオと呼ばれていましたが，このときはラムセス二世だったらしい。このことから時代を推定してますが，あとはわからないんですよ。アブラハムが紀元前 2000 年だなんていったって，だいたいの見当の話で，あんまりはっきりしないんです。

それはともかく，こうしてモーセが人々を連れて行く，エジプト王が追っ手を差し伸べる。前は海で後ろは敵軍。これはもういよいよダメだってなったときに，映画ではチャールトン・ヘストンという人があらわれて，手を伸ばして神に祈ると，海が真っ二つにぱあっと割れましてね。それっ，てわけでみんなこの人たちはそこを渡って，そして追いかけてきたエジプト軍がそこにすっと入ると，また海がばあっと戻ってきましてね。そしてモーセたちは無事に虎口を逃れることができる。これは大変有名なドラマティックなシーンで，このごろは，あの割れた海がどの辺だったとか，何が起きたのかとか，科学者が引き潮があったとかなんとかいろんなことを言ってますけどもね，まああんなふうに海がきれいに割れるというのは神の奇蹟であったとしか思えないところがあるんですが，そうやって逃れる。

そうするとたまたまその辺りに，シナイ山という山がありましてね。そこでモーセが山に登っていって，そこで新たに神からの，モーセの十戒と言われている掟を受けます。ちょっと正確にここで言えるかどうかあやしいんですが，私はただ一人の神である，ただ一人の神を敬え，ということが第一条だったと思います。それから，私はたいへん嫉妬深い神であるから，他の神の方に心を向けたときには重く罰するからよく心得ておけ，とうのが第二条にあったかと思うんですね。安息日を守れとかいうのもありました。やっぱり，何もせずに，安息日をちゃんともうけて，日曜日はちゃんと一週間に一回なければダメだぞ，と。

第五条あたりからが，だいたい常識的にわかることです。偽証をする

な，というのが非常に面白い掟ですね。偽証，偽りの証言をしてはならない，という。これを，神様が下してくれたんだ，といえばそれでもう何の説明もいらないのかもしれませんけれども，多少小ざかしいことを考えると，古代社会を維持する，その社会をきちっと維持していくために，証言というものをとても大事にする，ということが非常に大切であり，能率的でもあるわけですね。今の世の中だって，本当に誰も偽証しなかったら，警察や裁判所なんかの機能も，三分の二くらいいらなくなってくるんじゃないですかね。みんな必ず正しいことしか言わないんだ，偽りの証言はしてないんだってことになったら，社会能率的に非常にいい按配に運ぶだろうと思います。だけど，だいたい人間は偽証しますからね。だからそのために偽証した人をどうやって見抜くか，どうやって罰するか。そのためにいろんな経費もかかりますし，労力もかかりますし，秩序も乱れるということも間違いないので，ここでやはり，偽証をするな，というのを神の掟としておいたというのは，社会機能的にものすごく意味のあることだったろうと思います。

あとは，親を敬えということ，殺すな，盗むな，姦淫するな，というのがそこに続いてまいります。そして最後のほうに，となりの奥さんを盗んじゃいかんとか，隣の家畜を盗んじゃいかん，というのがまた一条ありましてね。これは，私は，前のほうに書いてある〝盗むな〟っていうのと同じだと思うんですけどね。やっぱり，隣の奥さんを盗むなというのは，もう一回言っておかないと，ときどきそれをやる奴がいるから，ということなんだろうかなあとは思います。

そういうふうに，今風に考えると矛盾している，いや，矛盾じゃないですが。同じことを二度繰り返して言っている部分もあるので，十戒はだいたい七戒くらいで済むんじゃないかなという気もしますけれども，とにかく，十の掟を受けてまいりまして，これを自分たちの宗教の基と，基本的概念としたわけです。

このモーセの十戒というのは非常に重みのあるもので，やがてこの流れのなかから，ユダヤ教が誕生していくわけですが，これがユダヤ教にとって当然重い掟であることは間違いありません。それからそのユダヤ教の中からイエス・キリストが誕生して，キリスト教が生まれてくる。キリスト教というのは，神学をご専門にされた方もおられると思うので

私なんかの浅慮で申し上げていいのかどうかわからないのですが，新約聖書を読んでいても，いったい新約聖書というものは何を理念としているか，なかなか読みにくいところがあるんですよね。それが現代の著述と違うところの一つでしてね。イエス及びその弟子たちがどんな奇蹟を起こしたか，ということはいっぱい書いてあります。それから，他の宗教に傾いたためにどういうひどい目にあったか，ということもいろいろ書いてあります。でも結局，この宗教は何を言おうとしているのか，理念は何なのか，ということはなかなか読み取りにくいところがあるように私には思えるんですね。

キリスト教について言えば，隣人を愛す，ということですね。汝の敵を愛す，左の頬を打たれたら右を出せという，要するに相手を尊ぶというところを言っている。これは確かに一つの，この宗教の大きな理念だと思います。でもそれ以外は，やっぱり結局淵源となっているのはモーセの十戒なんじゃないか，というふうに読めるところがずいぶんありまして，モーセの十戒は，ユダヤ教の原理であると同時に，キリスト教の原理でもあると思います。そしてこれは間違いなくイスラム教の原理でもあります。

イスラム教がユダヤ教の流れだと言ったら，イスラム教徒は怒ると思いますけれども，歴史的に見ると間違いなくユダヤ教の流れを汲んでいる。そのイスラム教も，現実に彼らはモーセを尊敬していますし，モーセの十戒というのを尊んでおります。そしてイスラム教というものをじっとみると，ああこれはモーセの十戒から出ているものだな，と思えるところがたくさんあるわけで，やはりここにおいて，この世界の三大宗教の理念が獲得されたと見ていいのかな，というふうに考えております。

モーセはこうやって，自分達の神の約束の地であるカナンの地へ向かいますが，到達する前に死んでしまいます。モーセが何者であったかというのはなかなかわからないところがありまして，モーセはもしかしてユダヤ人ではなかったんじゃないか，現地の人だったんじゃないか，それゆえに最後の約束の地には入る前にモーセが死んでしまったんじゃないかとか，いろいろそんなことも言われておりますけれども，モーセの流れを汲む人たちがやがてこのエルサレムの，カナンの地に入って，こ

こにまた繁栄を続けていくわけです。

そしてそこに，やがて紀元前 1000 年頃，今から三千年ほど前に，ダビデ，ソロモンという二人の優れたリーダーが現れます。これがもうたいへんな英雄でして，ここに古代のユダヤの王国が誕生いたします。たいへんな繁栄を得ることができる。

そうして，少し話を戻しますと，今回はアブラハムのことからお話しをいたしましたけれども，旧約聖書を読むと，世界がどう造られてきたかということが書かれております。はじめに光があってというところから始まる第一章のあたり，アダムとイブが登場するあたり，それからノアの箱舟が出てくるあたり，あのあたりというのはやはり神話の世界です。実際にノアの箱舟はここに着いたんだ，なんてことが発見されるとかなんとかってことが，考古学的に言われたりすることもありますが，基本的にはあのあたりは神話の時代であって，だいたい天地創造なんていうのは，アダムとイブが出てくる前の話ですからね。光あれと言われたって，人間が生まれる前の話ですからね。生まれる前の話を誰が見てきたんだってことになるんですが，あれは神話の時代なんですね。

こういうものは，当然のことですが，まず神話の時代がある。日本の歴史もそうであって，まず神武天皇ってのが登場するまではまちがいなく神話の時代であった。神武天皇だって神話の時代に属してるんだ，っていう考え方も成り立つんですが，だいたいあのあたりからぽつぽつ歴史の時代に入ってきたんじゃないか，と見られております。聖書の場合もそうでして，まあアブラハムのあたりから，アブラハムのあたりもずいぶん神がかっていますし，歴史と考えるにしては少し問題のある場所は随所にありますけど，でもこのあたりから人間の歴史として考えることができるところに入ってきたのかな，と思われます。

神話の時代はわりと有名なんですね。光あれと言われて光ができたとか，夜と昼とがどうしてできたとか，それからアダムとイブが登場してリンゴの実を食っちゃったとか，蛇が入れ知恵したとか，それからとうとうリンゴを食ったためにエデンの東に追放されて，だんだんだんだん悪い奴ばっかりはびこるもんだから，とうとうノアの箱舟ができたとか，ああいう話はわりと，お話としてよく知られておりますね。

ですから簡単に言えば，アブラハムより前がだいたい神話の時代であって，いかにも神話的なエピソードが伝えられる。そしてアブラハムのあたりからだんだん実際の歴史に近づいてきて，今申し上げた「アイヤー，ヨッ」の四人が登場して，やがてその後にエジプトに行ったモーセがまた約束の地に帰って来る。そして，そのモーセの流れを拠点として，ダビデ，ソロモンという新しい二人のリーダーが登場する。非常に長い複雑な歴史の，簡潔な中骨の部分だけが，こう見えてまいります。

ダビデとソロモンという人は親子です。ダビデっていうのは，けっこうつまんないことをしている人なんですけれども，深く後悔して神の前でごめんなさいって言って謝るんですよね。そうすると神は許してくれる。神はわりと偏愛するところがありましてね。ひいきするんですよ，すぐに。ダビデなんて完全にひいきされているような気がするんですけどね。

あるとき，一番高い，今でもありますけどね，ダビデの塔っていう，あれじゃないんですけどね，あれの原型になったダビデの塔っていうところに立って，なかなか余の統治した町は栄えておるなあと思って，こうやって見ていたら，向こうの方できれいな女の人が湯浴みしてるんですね。あれはなかなかいい女だなあって思って，あれは何者だって聞くと，ある将軍の，ややこしくなりますから名前はあんまり言いませんが，その将軍の奥さんだってことになる。そうか，じゃあっていうんで，戦争を起こして，将軍をそこにやっちゃうんですよ。そうしておいて，奥さんにはちょっと来いなんて言って，奥さんを呼び寄せましてね。仲よくしたあと，何か月かあとでしょうね。奥さんやってきましてね，赤ちゃんができます，って言うんですね。

非常にまずい，と。夫が戦争に行ってる間に奥さんが赤ちゃんをつくっちゃいますと，いろいろと問題がありますからね。それで急に将軍を呼び寄せて，ご苦労である，お家にちょっと帰ってすこし休め，なんて言うんですよ。お家に帰ると，しかるべき夫婦愛も発揮されるだろう。そうするとそこで赤ちゃんができたってそれでいいんだから，そうなるとどちらの種であるかよくわかんなくなりそうだからと思って，あきらかにそういうことを狙って，家に帰ってすこし休め，なんて言う。だけれ

ど，この将軍が立派な将軍ですから，兵士たちが戦っているときに，私は妻のところにぬくぬくと帰ることができません，ご門の前で徹夜をさせていただきます，なんて言って，全然家に帰ろうとしないわけですよ。

もうそれだと困っちゃうもんだから，何度も帰れって言うんだけど，きわめて忠実な将軍なもんだから，全然奥さんのところへ帰ろうとしない。そんなもんだから，この将軍をますますひどいところに追いやって，そしてとうとうそこで戦死させてしまって，そしてその奥さんを今度は自分の奥さんにしてしまう。

これはかなり悪いことのような気もしますけれど，ああ，悪いことをしてしまった，と神の前で悔やむもんですからね。赦しを受けまして，なぜかとても評判はよろしいんです。いいこともたくさんやってますけど，ちょっとまずいこともやってる。でも神の前で悔いて，悔いて，悔い改めるということがあるものですから，ダビデはわりと神様に愛されました。

その子供にソロモンという人がいて，これはある意味本当に偉大な王様であったのかなと，もう三千年も前の話だから私が今ここで想像したってしょうがないんですけれども，そう思いますね。

遠くからね，ソロモンを慕っていろんなお姫様なんかも訪れる。シヴァの女王，エチオピアだといわれていますけれども，そのシヴァの女王というのが，ソロモンはどんなにすごい王様かしら，なんていって訪ねて来る。と，やっぱり真に素晴らしい王様なものですから，たちまちそこで意気投合して，確かシヴァの女王は帰りにたくさんお土産をもらって，子種なんかもちゃんともらって帰って行ったはずですけれども。そのように，非常に，当時のいかにも王様らしい王様だった，と思います。

でもある意味では，宗教的にはあまり評判のよくないところがありました。これは何がよくないかというと，奥さんが，数は忘れましたけれど，相当いるはずですよ，百とか二百とか，そういう数でいたと思うんですが。もう少し少なかったかもしれませんが，聖書には書いてあるかな。かなりいて，そのほとんどが異教徒だったわけで，異教徒と交わって子孫を作るということ自体が，神の恵みを受けた一族としては非常に問題ありということで，そういう点でソロモンは少し良くないというところもあるようです。

しかし，別な目で見ますと，これはこの国だけの問題ではなく，やっぱり常に，人類の文化文明が発生する段階では，最初は，リーダーとは宗教的なリーダーだったんですね。卑弥呼もそうであったように，だいたい王という者，集団の統治者というのは，宗教的なリーダーであるという傾向がみられる。

このユダヤ民族の場合も，リーダーは常に宗教的なものを持っていた。唯一神の恵みを受けた人がリーダーになっていたわけです。ところが時代がだんだんだんだん発展してくると，宗教的リーダーと政治的リーダーというのはやっぱり役割が別なわけですね。当然，宗教的リーダーは常に必要だろうと思いますけれども。しかし宗教的リーダーが常に政治的なリーダーとして適切であるかどうか，というのは言い切れない。イランなどという国は，いまだに宗教的リーダーが政治的リーダーを兼ねているようで，うまくその人がふたつの能力を持っている場合はいいけれども，なかなかそうもいかない。

世界史的に見ると，というかヨーロッパ史的に見ると，このソロモンが登場したあたりから，やはり宗教的リーダーだけでは国がもたない。周辺にはアッシリアあたりから始まって，やがてバビロンなどという国や，もっと経つとローマなどという国が出てきまして，こういう国には圧倒的な政治的リーダーが登場するわけですね。

政治的リーダーというのは，これは政治的才能がものすごくある人が王の座につくわけです。少なくとも初代の皇帝はそうです。それは血筋からはね，吉田茂からだんだんだんだん妙になることはありますけれども，最初の人はね，歴然たる実力があるから王になっているわけでしてね。そういう王が登場してきて，やっぱりこれはスーパーリーダーなんですよ。そういうものが登場すると，宗教的リーダーくらいで，小集落をまとめていたような人ではとてもかなわなくなる。

ソロモンという人はどちらかというと，宗教的リーダーであったと同時に，非常にその，政治的リーダーでもあったんじゃないか。海軍なんかも大きくしてますし，国の財政というものを非常によく考えて，貿易なんかもものすごくよくやってるんですね。貿易をやるためには，奥さんをいろんなところに持っているというのは，当時としては大切なことで，王様の仕事の中には，歴史的に見ると，異国の女を娶ってその国を

支配下に治めるというのは非常に重要な能力でしてね。王様というのは常に好色の心ばかりでやってたわけではないんだと思うんですが，ソロモンもそういう感じだったんじゃないかと思います。

だから非常に，ソロモンの時代は，この国が変わってきまして，国力を蓄えた時代でもあった。だから政治的に見れば非常に偉大な国王であったろうと思いますけれども，宗教の教えとしては，ちょっと異端に属することにずいぶん手を染めたといもいえるようです。ユダヤという民族，国は，だいたいこの頃に非常に繁栄を極めて，これからはちょっと衰退に向かっていきます。旧約聖書が成ったのは，ほとんどほぼこのあたりだったという推定もあるようです。

しかし今申し上げたように，このあたりを頂点として，ユダヤの国は衰退していく。このユダヤという言い方が非常に難しくてですね。この民族，この人たちを何と呼んだらいいかというのは歴史的に違うんですよね。簡単に言えば，モーセがみんなで約束の地を目指していたときにはかなりの人数になっていましたので，それを十二の部族に分けまして，分割して全体を統治しないと，一人の力ではとても統治できるような人数じゃなかったので，部族ごとに分けた。その中にユダ族という部族がおりまして，このユダ族が，十二に別れた中でも際立って勢力を増しまして，ダビデもソロモンも確かここから出ていたと思います。そういうことで，そこで初めてユダヤということが出てくるんで，それ以前は当然ユダヤと言ってはおかしいわけですよね。血はつながっているにしても，ユダヤという言い方はおかしい。

じゃあ何と呼べばいいかなといって，私はイスラエルの民とか何とかという言い方をしているんですが。まあ，あのダビデ・ソロモンのあたりからユダヤ王国ができたことに間違いない。でもこのへんを境にしてだんだんだんだん衰退していく。その衰退していく中で，この人たちは，やがて自分たちを救ってくれる救世主が現れて，そしてダビデ・ソロモンの頃のような繁栄を自分たちにもたらしてくれる，ということをずっと心の中で願い続けていたわけです。で，途中それぞれの時代に何人かのすぐれたリーダー，まあ聖書が伝えることですから，主として宗教的なリーダーが登場しますけれども，でもなかなかこれぞという人が現れてこない。

いつかきっと，そういう，民族を救う救世者が現れてくるに違いない。と，こう思って願っていると，やがて，ダビデ・ソロモンのときから千年たったあたりで，はい皆さまお待たせいたしました，と現れたのがイエス・キリストであったわけです。

暮れになると救世軍の鍋が，東京の街なんかにも出てまいりまして，もろびとこぞりて迎えまつれ，というのが歌われます。久しく待ちにし，主は来ませり，主は来ませり，という歌ですが，久しく待ちにし，千年ほど待ってた主は，とうとう現れました，ということです。

これはもうキリスト教関係の方，信仰をお持ちの方は，よくご存知のことだと思いますが，このとき現れたイエスに対して，ユダヤ教の人々は，これは私たちの待ってたあの偉大なる救世主ではありません，と。そこそこの奴かもしれませんけれどこれは違います，と拒否したわけですね。拒否は今日まで続いているわけで，ここでユダヤ教とキリスト教が分かれるわけですね。ここで，偉大なる聖人が現れた。でもユダヤ教の人たちは，これは違う，自分たちが待っていた聖人ではありません，と。ユダヤ人の方々が待っていた聖人はまだ現れていないようですけれども。それから二千年たっているんですけどね，まだダメなようです。

そのように，一人のナザレの人が現れて，ここに神との新しい契約を結ぶ。それがキリスト教の誕生であります。ここにキリストの言行を伝える新約聖書が登場するわけです。今日，『旧約聖書』，『新約聖書』と言われておりますが，あれは簡単に言えば上下二巻本です。上下二巻本で，前の本で古い神との約束，初めの約束が記されている。モーセなどが結んだ神との古い約束です。そしてイエス・キリストが現れて，あれはちょっと古くなったと，新しい契約をまた神とここで結ぶべきであろうと，そういうことで神との契約が結ばれて，その内容が記されているのが『新約聖書』。というわけでこれは上下二巻本であって，キリスト教にとってはイエスが現れてからの下巻本の方が重要なんだけれども，それはみんな上巻本から糸を引いているわけですから，上下セットで自分たちの聖典としている。というのが『旧約聖書』，『新約聖書』の関係です。

でも，ユダヤ教にとってみれば，イエス・キリストをすごい預言者と見たわけではないですから，この人の言行を記した新約聖書っていうの

は，別に俺たち関係ないよ，と思うのは当然のことで，ユダヤ教にとっては上巻だけでいいんです。下巻はいらないんです。上巻だけが自分たちの聖書である，というように，当然そう考えて，それは今日まで続いております。だからユダヤ教の聖典というのは，旧約聖書と非常に似ているんです。内容的には非常に似ているんですが，配列の順序などが少し違います。

そしてユダヤ教というのはあまり布教に熱心じゃないんですね。キリスト教はほんとうに布教に熱心で，日本をはじめ，おかげで今ここにこういう学校が建っているんだと思いますけれども，東洋の果てまで行って，東洋の果てからアフリカであろうと南米であろうと非常に熱心に布教しました。それに比べるとユダヤ教というのは，一族の宗教であり，みんなでこういう高い帽子も昔からかぶって，あれは神に対する敬意の帽子ですから，あれをかぶって，もみあげをこう長くしまして，ご婦人が大勢いるのでちょっと申し訳ないけど，割礼という何か変な儀式を必ずおこないまして，それをずっと守り続けているというわけです。だから，一族にはこういう宗教であるぞ，と教えるのには熱心であるけれど，基本的にあんまり，異民族にこれを教えるということには熱心でないもんですから，ユダヤ教の原典というのはなかなか見ることがないんです。日本語で訳されたものなんてあるのかな。私は少なくとも，全訳のものを見たことがありません。英語では見ましたけれども。

これは旧約聖書と内容が非常によく似ているんですが，配列が違っている別物です。これを何と呼ぶかというと，呼びようがない。聖書というのは，言ってみればわかるように，聖なる書，と言っているだけであって，私たちは聖書と言ったときはキリスト教のあの旧約聖書と新約聖書のことだとだいたいは思いますけれども，でも聖書という文字を見たら，別にそういう意味ではないわけですね。聖なる本だって言ってるだけのことですから。ユダヤ教では，その上巻本を聖書っていうんですね。だけどこれは区別がつきにくいもんだから，ユダヤ教の聖書，というように言うより仕方ないんです。どうしても区別が必要なときは，その頭文字をとって，タナクという呼び方もあるようですが。そういうふうに片方は，上巻本だけで完結している，片方は上下二巻本で完結している，というのが『旧約聖書』，『新約聖書』の関係です。

今のエルサレムに旅をされた方がおられると思いますが，市内の真ん中のほうに，嘆きの壁という，城門の一部と言えばいいのか，そういうところがありまして。そこのところに，ユダヤ教徒が，いま申し上げたように黒い帽子をかぶって，こういうもみあげをして，真っ黒い衣装を着て，壁の前に立って涙を流して，祈って，何かを呟いています。何を祈っているのかなって聞いたら，いろんなことを祈っているんでしょうけれども，その重要な項目に，どうか自分たちの民族に繁栄を取り戻してほしい，ということをひたすら祈っている。

その繁栄というのはいつ頃のことをイメージしているのかというと，ダビデ・ソロモンの頃が再びこの地にめぐり来ますように，ということを一生懸命祈っているんだといいますから，ずいぶん古いこと祈ってるんだなと思いますけれどね。やがてダビデ・ソロモンのような優れた救世者が現れて，自分たちの民にアブラハム以来のあの神が約束したことを実行してくれたらいいなあ，と思いながら，涙ながらにずっと祈っている。

この民族もイエス・キリストの前あたりで繁栄したことがあるわけですが，これを最後にローマが台頭してまいりまして，イエスが誕生したときにピラトというのがおりましたけれども，植民地として，そのローマの侵略を受けました。

死海というところがありますね。塩分が非常に濃いもんだから，あそこに浮かぶとこうやって中で本が読めるという。あれはそう簡単ではありません。私はちゃんと水着になってあそこに入りましたけれども，やっぱりね，あれは左右のバランス，前後のバランスをちゃんととっていないと，なかなか簡単には浮かないんですよ。泳げる人はかえってなかなか浮きにくい。けっこうひっくりかえって，ひっくりかえると，粘膜の部分にあの水が入ってたいへんなんです。だから口，鼻，目，これはもうたいへんです。だから首から上は出しておかなきゃダメです。はなはだ尾篭な話をいたしますと，あの湖の中で私はおならをしたんですが，するとやっぱりおならというのは一瞬あのあたりの粘膜がきゅっと外に出るんでしょうね。ぴっと痛みが走りましてね。ああそうかと思って。だから顔なんか突っ込んだらたいへんなことになります。もうほんとにバランスよくこうやっていないとダメなんですが。

その死海の側にマサダという要塞，山がありまして，そこに要塞が今でも残っておりますけれども，このときユダヤがエルサレムから追われに追われてあそこに逃げてきて，二百数十人くらいの小さな集落をつくっていました。ローマに攻撃されて，ここで全員玉砕して滅びるわけですが，これが確かAD，キリスト紀元の70年代，72年ですか，70年くらいです，だいたい。マサダが滅び，ここでユダヤ王国は滅びました。そして彼らは世界に散って行きます。

その散って行ったユダヤ人ですが，だいたい民族というのは，こういう形で国が滅ぼされてしまったら，それから世界に散って行って，それぞれ混血をしたり，いろんなことしながら，なくなってしまうのが普通です。消滅してしまうのが普通なんですが，この方たちは，唯一神を，自分たちの神を信じ，一族の団結を固め，そうなってからもずうっと自分たち一族の血といいますか，神といいますか，それを信じ続けたわけですね。

そして国をなくした人たちが，じゃあどうやって自分たちは生きのびたらいいかと，国がないってことは私たちにはほんと想像できませんけれども，国をもたない民族がどうやって生きのびたらいいんだろうかといったときに，次に頼りにできるものは，お金です。だからユダヤ人というのは，シェイクスピアのベニスの商人を見ればすぐわかるように，もう，あくどい高利貸しということで世界にとどろいたわけですが，やっぱり彼らはお金を頼りにするよりほかに何も頼りにするものがない。それでずっと，ああいうお金を商売することによって評判を悪くしたりしながら生きながらえたわけです。

やがてだんだんだんだん世紀が進んでまいりますと，この人たちは銀行家になりました。高利貸しと銀行家というのは基本的には同じ職業だと考えていいわけでして，そしてやっぱり民族的には優秀だったんだろうと，私は思います。特に金融界では，世界を支配している金融はほとんどはユダヤ系だといわれておりますね。ロスチャイルド家なんていうたいへんな財閥がありますし。で，こういう人たちが，世界の状況の中で，当時力のあったイギリスあたりといろいろ折衝して，やっぱり俺たちの国をもう一回つくってもらおうよ，ということで，1948年に，今のところにイスラエルの国が誕生したわけです。古代ユダヤ国家が滅亡し

たのは，これは 70 年代くらい。70 年代に滅びた国が，1948 年に再び甦るというのは，これはね，たいへんなことだというのはお分かりだと思うんです。日本の歴史なんてこの中にすっぽり入ってしまうんですよ。卑弥呼の登場だって，もっとこの後ですからね。このマサダの要塞が崩れたときに比べれば。

日本の歴史がすっぽり入ってしまう間，彼らは国を持たずに，ずっと世界をさまよいながら，金融業をやりながら，一族の形をしっかりと守って生きながらえて，1948 年に今のイスラエルという国をつくったわけですよね。これは本当にたいへんなことだと思います。この人たちの団結力というか，宗教，神への思いとか，そういうものはもう並大抵のものではない。

これから申し上げることはですね，バカヤロウと言って袋だたきにあいそうですけれども，真意をどうか理解していただきたいんですけれども。ヒトラーというたいへん悪名高い人がいますね。あの人はゲルマン民族でこの世界を支配しようと思ったわけですよ。そのときに，ユダヤを滅ぼさないことにはそれは不可能だと思ったのは，それはヒトラーの考えることとしては正しかったと思うんです。千数百年，自分たち一族をずうっとあんなに保ってきて，金融力においては世界を席巻するほどのすごいお金の力を持っていて。そうして事実，優秀な科学者とかね，今だってノーベル賞をとった人なんてみるとかなりの数がユダヤ系。ああいう知能を持っている，経済力を持っている，そして信仰心も一族のまとまりも強い，こういう民族をそのままにしておいたら，ゲルマン民族が世界を支配するなんていうのはとってもできない。だからユダヤ人は根こそぎやっつけなければダメだと思ったのは ── あれは大変悲惨なことをやって，それはもうヒットラーが良くないというのは誰だって認めることで，私もその通りだと思いますけれど ── ヒットラーの野望を考えたら，その考え方においては正しかった，という気もいたします。

そういうすごい民族であった。その民族の宗教というものが，ユダヤ教というものに結集されている。ユダヤ教は，旧約聖書を読んでもすぐわかりますけれども，明らかに選良的な思想ですね。自分たちが神の恵みを受けている。アブラハムがそもそも神の教えを受けて，そして西へ西へと行って一族を繁栄させよと言われた。自分たちが基本的に偉いん

だ，他はそんなに偉くないんだ。ということで成っていることは間違いない民族で，これはやっぱり，20 世紀，21 世紀となってくると，そのままでは推し進めるわけにはいかない。やっぱり他民族との関係を考えねばなるまいな，と譲歩して考えるようにはなってまいりましたけれども，私は，やっぱりこの人たちは宗教的にいうと，根源において，自分らは特別神に選ばれた民族だという考えを，けっして捨てきれないところがあるだろうなあ，とは思っています。さすがにこのことをあんまり公にすることは，この方々もしませんけれども。

で，そうであればこそ，イエス・キリストが現れて，隣人を愛すんだと，つまり自分たちがエリートであるということ，そのことによって自己中心になったらまずいぞと言ったのは，まことにその通りだと，その通りであると同時にインパクトは大きかったと思います。

日本人はわりと，選良思想というのはあまりないほうですからね。隣人を愛せ，ということをわりと普通な感覚でとって，やはり隣の人だってそうだし，日本人はほら，生きとし生ける者はみな同じだというような思想，これは仏教的な思想ですけれどもね，それを持っている。日本人はもう犬も馬も蛙も人間と同じで，もしかしたら来世は自分は馬になるのかもしれないから，馬のことも鞭打ったりしちゃいかんなとか，そういう感じの，隣人を愛せよ，という感覚があるんですけれど。

その後キリスト教はありとあらゆる神学に分かれていきましたんでね，キリスト教の理念を考えるのはなかなか難しいところがあるんですが。でも，やっぱりあのときにイエス・キリストの教えがすうっと野をかける火のように広がっていた一つの理由は，そういう選良思想が席巻していた中で，隣人を愛すという，明らかに選良思想とは少し違う，自分たちだけがエリートなんだという思想とは違う，世界観を持っていたということが，あの時代，世界がいろいろ和合していかなければならないときに，大きな意味を持ったのかな，と私は考えたりしております。

そして，キリストの言行，言葉と教えは，マタイ，マルコ，ルカ，ヨハネの四つの福音書によって伝えられてきました。イエス・キリストが書き残したものは，一つとしてあるわけではない。つまり基本的にはこの四人のイエスの言葉を聞いた人たちが，イエスはこうおっしゃった，

こういうふうに行動された，ということで伝えていく。これがこのイエス・キリスト教の根幹となる教えとなっているわけです。「ヨハネの福音書」は別格だといって扱う人がいるんですが，私は特に別格に扱う必要はないと思います。少し妄想的に書いてありますけれども，特に「ヨハネの福音書」を別にすることもない。みんな，四人が四人なりにイエスの教えを書いている。

四人の人間が書いているんだから，みんな同じことを書いていて，基本的には同じ人の行動を書いてるので一致するはずだけど，四人がそれぞれいろいろな立場で書いていれば違うわけで，四つの福音書はつぶさに読んでみると微妙に違っているところもあるし，ある人は書いているけれどもある人は書いていない，などといういろいろなこともあります。そして非常に重要なことは，このマタイもルカもマルコもヨハネも，キリスト教を人々に広めようと思って，布教をやりながら，主はこういうふうにおっしゃったんだ，と言ってますからね。どこでどういうふうに教えるかということによって，その人の立場によって，違うところもあるわけですね，当然。

まあ，とんでもない教えもあるじゃないかと，あまり信じてない方に言わせると，あの奇蹟というのがよくわかんないんですよね。最初から処女が赤ちゃんを産んじゃったりしていいんだろうかな，と思って心配になるしね。ちょっとしたパンが何十人分ものパンになったりね。らい病の人がすぐにぱっと元気になって歩いたりして。ああいうところを読ませられると，うーんといって悩むんですけれども。まあこれは，キリスト教徒であれば，あれは丸ごと信じないとたぶんいけないんだと思いますね。いろんな考え方があって，かつてそういうことがあったというふうに信じるというのも，私は一つの考え方だと思います。それが信仰というものだと思います。

でも，小ざかしいことを申し上げれば，あれはすべてひとつの寓話である，と。まだまだいろんな考えをもった人，未開の人なんかもいっぱいいて，この教えがどんなに優れているかということを教えるときに，やっぱり寓話的な手法を用いないと，その人たちに浸透させることができないという，そういう状況の中で語られたこともいっぱいあったんじゃないかな，と。そういうふうに考えるとよろしいんじゃないかと思っ

ております。

私は，『旧約聖書を知っていますか』，『新約聖書を知っていますか』の前に，最初に『ギリシア神話を知っていますか』という本を書いているんです。ギリシア神話は，私が小さい頃から親しんだ世界でもあったし，私の考えといろいろ近しいところもあったもんですから，それなりに書きよかったんですが，しかし欧米人の心を尋ねるということになったら，ギリシア神話も大切だけれども，聖書を抜きにして欧米人の心を尋ねることはできない。ギリシア神話を語ったんなら，次に聖書のことを語ろう，と思いました。相当早い時期からこのことを考えていまして，なんとなく考えてから本当に執筆するまでに，かれこれ十年くらい年月をかけたような気がいたします。

旧約聖書というのは，今ちょっとお話しましたけれども，ユダヤ人の建国史，ユダヤ人がアブラハムから始まって，自分たちの民族をどういうふうにしてきたかという建国の歴史，と読むこともできるので，それはそれで，こういう話ですよといって，本妻と異民族の妻とのケンカみたいなものだったなんて，バカみたいなことを書くこともいろいろできたわけです。それを書き終えて，次は新約にかからなきゃならないなと思ったときに，たいへん悩みました。まあ結局，よし，と思って本腰を入れてから書くまでに三，四年かかったりしたんですが，先ほども申し上げましたように，私は信仰を持ちませんけれども，信仰を持つということはたいへん尊いことだと思っていますんで，ここで，信仰を持っている方の心を逆なでにするような揶揄や，半畳など，そういうことは出来るだけ書きたくないと思いました。

でも，本来的に信仰の書である新約聖書のことを，信仰から離れて書くということは非常に難しかったんです。そこを非常に悩みました。一時は書けないんじゃないかと思いました。どう読んでみても，信仰の問題を抜きにして新約聖書を語るということはできないんじゃないか，と。

やっぱり，イエスが何であったかということの，私なりの考えがなければ，この本は手をつけられないなということにたどりつき，簡単に結論を申し上げれば，イエスはあの時代に誕生した偉大な社会革命家であった，と。キリスト教徒にとっては，イエスは神の子であるということが自明で，そこから全てがスタートしなければならない。神の子であ

ればどんな奇蹟がおきたってちっとも不思議ではない。しかしそれを言われたって，信仰をもたない人間にとっては，なかなか納得できないところが随所に出てくる。だから，あの奇蹟について，ひとつの寓話として理解すればいいところが充分にあるし，これはあの時代に現れた，非常に虐げられた人が大勢いるなかに現れた，一人の社会革命家であったんじゃないか。というふうに考えれば，それなりに理解できるところはある。ということで，この本をつくっていったわけです。

そういう目で見れば，それなりに理解できるところがたくさんあります。イエスの磔刑と復活，これもその通り事実があったんだ，というふうに考えるのが信仰の立場だけれども，普通の人から考えると，殺されちゃった人がどうして次の日生きて出てくるのかなあ，となかなか納得がいかない。松本清張ばりの推理をいろいろしてみました。松本清張の読者でもあるもんですからね。ここからはもう私の勝手な雑談だと思って聞いてください。

ここに，アリマタヤのヨセフという人が現れるんですね。イエスの最後の晩餐に出てくる人たちというのは，ほとんどがガリラヤの漁師さんなんです。エルサレムは当時の大きな都です。それに比べればガリラヤは僻地ですね。漁師さんだからということもないんだけど，そういう第一次産業に携わっている人たちだから，あんまり教養があるわけでもない，特にエルサレムという土地ではほとんど力を持っていない人たちが，イエスにくっついてやって来た。でも，そういう人たちばっかりじゃなくて，いろんな弟子たちがいて，相当の宗教集団を当時すでにつくっていた。その中に，アリマタヤのヨセフという，これはエルサレムの有力者，議員だったというんですが，とにかく有力なお金持ちであった人です，その人がいた。

イエスがどんどんどんどん，自分はここで磔刑にあって，十字架にかかって，そして復活する，ということを宣言していきます。自分のところの大将にそれを言われるとちょっと困るところもありましてね。どうしてもそっちの方へそっちの方へと進んで行くもんだから，よしそれじゃあ，そこまで言うんなら，実際磔刑が行なわれるんだったら，復活させてやれ，と思ったのが，私は，このアリマタヤのヨセフという人だっ

たんじゃないか，と思います。

聖書をよく読むと書いてありますが，イエスは一応，罪人として死ぬわけですね。この罪人の死体を払い下げてもらって懇ろに葬る，なんていうことは，なかなかできない。ある意味では危険なことでもあったわけです。事実，ペテロなんかは何にもできないんですね。裁判の最中だって，あんたこの人の仲間だろうなんて言われて，いや知らん知らん知らんなんて言って。その前に，明朝鶏がなくまでにお前は三度裏切るだろう，なんてイエスに言われてて。そして，実際言葉が似てるもんだから，仲間だろうなんて言われたり，この人一緒にいるところ見たわよなんて言われたりすると，いやいやなんて逃げていったりしてね。あんまり立派なことやってないんですよ。

でも，一番弟子であるペテロがそういうことをやってるときに，その磔刑に処された死体をもらい受けて，懇ろに葬る手続きをしたのは，このアリマタヤのヨセフという弟子だったわけです。あの磔刑の前後のことを考えたら，一番イエスに対して篤実なことをしたのは誰かといったら，このアリマタヤのヨセフであることは間違いない。それができたというのは，有力者であったからでね。

イエスが神の子として復活したのなら，何も言うことはありません。でも，これがそういうことではなくて，現実的なものとして考えたら，これを演出できたのはアリマタヤのヨセフしかいなかったと思います。死体をもらい受けて，それを自分の屋敷の中に置いて，そして，イエスに会ったとか，おはようと言ったとか，そんなことは誰にだって言わせることができるし，よく似た人をその辺を少し歩かせれば，会ったわよっていう人だって必ず出てくるわけですから，その辺のことはやろうと思えば全部できる。ただやっぱりあの一連のことは，死体をちゃんと持って，棺を持っていった人でなければできないことですね。だからそういうところに，私はあのあたりに，死んだイエスを復活させるという策略を実行した人がいたんじゃないか，いたとしたらこのアリマタヤのヨセフしかいないんじゃないか，と。

ところが，これも生臭い話ですが，リーダーを失った集団がこれからどうしようか，ということで，一種の，わかりやすく言えば跡目争いみたいなこと，それなりの権力闘争があったんじゃないだろうか。その中

で勝ち抜いたのが，ペテロたちであったんじゃないか，十二使徒たちの一族だったんじゃないかな，と。その中で，アリマタヤのヨセフという人は，ある意味では，勢力争いに破れて抹殺されていった人なんじゃないか，と。

だから普通に考えてみたときに，イエスの磔刑のときに一番貢献したのはアリマタヤのヨセフだったと思いますけれども，その後の後継者争いの中で破れて，まあ抹殺されていく。でも，どう抹殺してみても，この人があの磔刑のとき死体を受け取ってきて，懇ろに葬ったという事実だけは誰にも否定できないわけで，そこの部分だけが聖書に残って，あとは聖書辞典を引いてみても，アリマタヤのヨセフという人についての記録はほとんど残っていません。だから，イエスがまだ生きているときに，イエスの弟子としてどういう立場を担っていたのかということとか，そういうことはなかなかわからない。

派閥争いが結構ひどかったということは，「使徒行伝」なんかを見てもわかりますね。パウロは，イエスの直接の教えを，じかに顔を見てうけた人ではありません。でも，パウロなくしてキリスト教なしといわれるくらいで，パウロがローマ市民であり，ギリシア語もローマ語も話せたということもあって，布教にものすごい努力をして，キリスト教が成っていくわけですが。このパウロと，イエスから直接の教えを受けた人たちの争いというのがけっこうきつかったというのは，今の「使徒行伝」などを見ても読み取れますよね。パウロは精力的に活躍して献金を集めてくるんですけれども，本部の方はあんまり彼を尊重しているようには見えない節がありますが，やっぱりあのあたりに，誰がこの優れた宗教の後継者になるかということについて，非常に面白い，面白いというかすさまじい争いがあったんじゃないか，というふうに思ったりしております。

ところがこの，アリマタヤのヨセフというのが，今度は「アーサー王伝説」という，イギリスの伝説に登場するんですね。これがまた不思議な話しで，それからまた六百年くらい経ったあたりのアーサー王というイギリスの伝説に，どうして彼が登場するのか，その経路がよくわからないんです。やっぱり民話を愛する人と神学の人が別なせいか，ここのところでいろんなことを調べてみても，あんまりよく繋がらないんです

ね。

話は飛ぶんだけれども，ヨーロッパにおけるマリア信仰，特にこれはカトリックの中で，非常に強い部分があります。お亡くなりになる少し前の遠藤周作さんとお話して，遠藤さんが，宗教には慈悲というものがある，仏教にも慈悲というのがあって，その「慈」というのは何かというと，その人を宗教的にきちっと導いてやるっていうのが「慈」なんだ，と。それに対して，とにかく哀れな立場にいる人を，包み込むようにこう優しく抱いてやる，全てを受け入れて愛してやる，これが「悲」なんだ，と。で，宗教というものは「慈」と「悲」と両方が必要なんだ，と。片方で神の掟がこうであるから，こういうことを守ってちゃんと生きていかなきゃならないんだよときびしく導くのが「慈」。それとは別に，母親が赤子を抱くようにこう包んでやるのが「悲」という恵みなんだ，と。その二つの方向がないと，宗教というものはなかなか人々に浸透していかない，人々の助けにはならないんだ，と。

そういう立場に立つと，キリスト教においては，イエスが担当したのがその「慈」の部分であって，基本的にはイエスも結構厳しいんです。いい加減な奴は罰していますからね。そういう，規律をきちんと守って，人間としてどういうふうに生きていかなきゃならないのかをきちっと守る，という方がイエス。それから，とにかく哀れな人間を包み込んでくれるように愛してくれる，というのがマリアの担当。というふうに俺は思うんだよ，と遠藤さんはおっしゃっておりました。

私も，ああそうなのかと思って。私もそうですが，弱い人間はいっぱいますから，みじめな人間はいっぱいいますから，イエスさんの前に出ても後悔ばっかりして，反省ばっかりしていなきゃだめだけど，まあとにかくマリア様が来て，許してあげるわ，ここへ来なさい，と言ってくれる方がやっぱり嬉しいな，ということがあって。日本なんかにおいても，この国にキリスト教が入ってきたときに，下々のひとたちは，やっぱりそういう慈愛ですよね，とにかくこう包み込んでくれるような優しさというものを求めたところがあったんだろうな，と。そういうことで，マリア信仰というものがどんどんどんどん広がったのかなあ，と。だって，ヨーロッパに行くとね，イエスさんそっちのけでマリアさんばっかり大切にされてるようなところはいっぱいありますからね。

ダンテの『神曲』を読んでいるうちにふと気づいたことがあって，これも素人の考えなんですけれども。三位一体の思想が誕生して，それがキリスト教の中心的な考え方になって……。三位一体とは何かっていうことも難しいんですけれど，神と子と聖霊がみんな一緒だといってるんですね。神様と，子であるイエスと，それから聖霊というのはお化けみたいなものなんですけどね，宗教的なぼやっとしたものを言ってるわけですが，その三つが同じになって，その分だけイエス様が遠くなっちゃったんですよ。神とそれがみな一緒だということになると，神様をそんなにそばに実感することは我々はできないですよね。そうすると，私たちがマリア様に祈ることによって，仲介者としてのマリアさんがいてくれることで，イエスへのワンクッションが入る。三位一体の神学の考え方の中では，なかなかイエスさんを直接身近に感じることができない。その仲介者としてのマリアを必要としたんじゃないか，と。

『神曲』なんかを見ると完全にそうで，『神曲』はご存知のように，地獄，煉獄，天国と進んでいく。ダンテは，天国に行ってマリアには会います。けれども，イエスには会いません。ちらっと，あれがイエスかな，と，そういう場面はありますけど。要するに神格ですからね，神様ですから。三位一体でありますと，イエスは生身の人間として，目に見えるような形で出て来てはくれないんですよ。そうすると当然天国に行ってもイエスには会えない。でもマリア様には会うことができる。マリア様を通してイエスを感じることができるという，そういう構図がある。あそこにベアトリーチェという案内人が出てきますが，ある意味ではベアトリーチェがダンテにとってのマリアであったんじゃないかなと，ベアトリーチェを通して彼は神に近づいていくことができたんじゃないかなと，そういう構造のような気がします。

アーサー王伝説を読むと，なんとこのアリマタヤのヨセフが，そのマリアみたいな役をやっています。アーサー王伝説の騎士たちは敬虔なキリスト教徒ですから，強くキリスト教を信じておりますけれども，この人たちもなかなかイエスに直接は，こう姿を見るなんてことはないわけで，アリマタヤのヨセフが出てきて，仲介をやってくれて，そのアリマタヤのヨセフを通じて，イエスを感じる，という構造になっている。どうしてこんなところでそんな重要な役割をアリマタヤのヨセフがやるよ

うになったのか。やっぱりあそこでは派閥争いの中で排除されているんだけれど，ローマを追いやられてブリテンのほうに流れ流れて，そこでまた役割をもったのかなあ，なんていうことを感じたりしております。

有名な『クォ・ヴァディス』を読むとネロの残虐性が良く出ていますけれども，そうして最初ローマによって排斥されていたキリスト教も，やがて，313 年に公認されて，ローマの国教となります。

これからしばらくはローマと，あの古代ローマそのままではありませんが，神聖ローマ帝国，あるいは，フランク王国，フランス，イタリア── イタリアという国ができるのはずいぶんあとですけれども ── あの辺の国々によって，ローマンカトリックという素晴らしい宗教が誕生する。東方では東方教会ができて，キリスト教はずっとヨーロッパを中心に人の心に訴えてくるということになりました。

あと五分だけいただいて，もう一つ大切な話をしておきますと，アラブ社会には 600 年代に，マホメットという人が登場します。マホメットは，四十歳くらいまで普通の商人として暮らしておりましたけれども，ある日，神の声を聞いて，そして新しいイスラム教という宗教，神の言葉を伝える宗教を開きます。

その言葉を記したのが『コーラン』という，これもずいぶん厚い本ですが，あれは全部神の言葉です。マホメットが聞いた神のことばを著しているわけであって，マホメットが言っているわけではない。解説しているわけではない。それがタテマエ，と言ってはイスラム教徒に叱られてしまいますけれど，そういうことになっております。妻は四人持ってもいいけれども平等に愛してやれ，なんてことを神様がいちいち預言で言うかな，遺産相続のときには誰には何分の一やったらいいとか，そんなことまで神様がいちいち教えてくれるのかな，と思ってそれを読んでいるとちょっと心配になりますけれど。そういうことを言うと今日の帰り道に殺されるってことがありうるんですけれども。

重要なことは，マホメットが言い，イスラム教の理念となっていることは，全部同じ神様だ，ということなんです。読んでみるとコーランというのは，旧約聖書と，タナクと，非常によく似ています。もうそっく

りの話がいくつも出てきます。新約聖書とも似ている。だからユダヤ教徒やキリスト教徒に言わせれば，お前あとから出てきてイイトコドリやりやがってと，それはもう率直にそういう思いはします。けれども，これはイスラム教の方からしますと，同じ神様なんだ，と。旧約聖書ではヤハウェと呼び，新約聖書ではわが主と呼び，自分たちがアラーと呼んでいるのは，みんな同じ神様なんだ，と。同じ神様なんだから，言ってることが同じなのは別におかしくはないだろう，というのがイスラム教の考え方で，イスラム教はアブラハムはもちろんのこと，モーセ，それからダビデ，ソロモン，イエス・キリストに至るまで，みんな尊敬して，これらは偉大な預言者だと言っております。

こういう預言者を神様が何度も何度も送ったにもかかわらず，人間どもはいまだにまだ改まってはいない。ここでいよいよ最後に，一番偉大な預言者としてマホメットをこの世に送ったんだ，と。だからマホメットの言うことを良く聞け，と。今までの横綱もみんな強かったけれども，やっぱり大鵬が一番強いんだ，というのと同じ理屈でしてね。ここにいよいよ一番強い横綱が現れたという考え方ですから，きわめて内容的には似ております。

似ているけれども，やっぱり近親憎悪というんでしょうか，結構ケンカは激しかった。これには，歴史的ないろんな理由があるんで，これはまた説明するとゆうに一時間はかかりそうなので，ここでやめておきますけれども。でもやはりイスラム教が，源はみな同じなんだ，三大宗教はみな同じ神様から生まれたんだ，という考え方なのは間違いないのであって，その和合がなぜできないのか。ユダヤ教とキリスト教もけっこう血の流れるような争いをしたことがあったし，特にユダヤ教とイスラム教との争いは，21 世紀の大きな問題となって，あそこに 21 世紀世界の火薬庫があることは間違いないような気がいたしますけれども，それはみな同じ神様のところからでたものである。神の御心はどのへんにあるんだろう，ということを考えてしまいます。

非常に雑駁なお話しであり，細かく言うと，そりゃ違うよ，ということもいろいろあろうかと思います。カトリックの学校でお話しするにしては少しまずかったかなあ，という部分もあるような気がしたんですけ

れど，普通な者として，聖書をこんなふうに考えたらいいんじゃないかなあという，勝手なお話しをさせていただきました。

どうもありがとうございました。

［付記］

この文章は 2009 年 7 月 18 日に行なわれた阿刀田高先生の講演の記録です。藤女子大学キリスト教文化研究所が先生の了承を得て録音テープから文章化しました。